
殺人衝動

佐々岡洋介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人衝動

【Nコード】

N7981J

【作者名】

佐々岡洋介

【あらすじ】

とある廃墟で流れている噂話を探る神田ユウとラビの二人、そこに現れたのは……

殺人衝動？

浮浪者や身寄りの無い孤児が集まる街があった。街と言ってもそこは廃墟ばかりのゴーストタウンだ。疫病か、災害か、もしくは街単位での移住があったのか、知らぬ間に街からは人が消え、気づけば主を失い朽ち果てようとしていた住居には浮浪者や孤児が住まうようになっていった。

廃墟、ただそこに人がいるだけ、そこに活気や経済活動は無く、ゆるやかに死に行く街は街本来の機能は失われ、ただ、虚無感と砂塵が漂うだけだった。

そんな街の孤児の間で、実しやかにささやかれている噂話があった。二つの怪談めいた噂話――

廃墟に少女が一人。

その少女の不幸を上げれば限は無い。しかし、あえて挙げるなら噂話の一つをたまたま知り得なかったという事になるのではないだろうか。

廃墟と化した街のとある廃屋、少女が膝を抱えて肩を震わせている。暖を取る事も出来ず、ひたすら寒さに耐えながら朝が来るのを待っていた。一秒一秒が恐ろしいほど長く感じられる。まるで、寒さにおびえるように肩を震わせながら、少女は静かに目を閉じていた。

いつもの事、眠ってしまえば、すぐ朝になる。大丈夫。大丈夫。大丈夫。自分に言い聞かせるように、少女は呟く。

「お嬢さん。寒かったでしょう。でも、もう大丈夫よ」

少女が目を覚ますと目の前には見知らぬ婦人が立っていた。

荒れ果てた廃屋にはおおよそ似つかわしくない風貌。一見して高級とわかる毛皮のコートを纏った婦人は、幼いながらも、一生自分とは関わり合いの無い人種であると少女が思えるほど、美しく凜としていた。

状況を理解する事が出来ずにただ婦人を見上げる事しか出来ない少女に、夫人は自らが羽織っていた毛皮のコートを震える肩へとかけた。驚くほど軽く、そして、驚くほど暖かいコートだった。

「暖かい……」

少女は呟いた。

「そう、それはよかった」

婦人は続ける。

「でもね。もっと、暖かいものがあるわよ。それをあなたに教えてあげる」

「え？」

コートを両手で掴み包むようにしていた少女が婦人の顔を見上げる。この世にこれ以上暖かいものがあるのだろうか。少女は考えながら夫人の顔を見つめていた。

婦人は、少女の目線の高さまでそつと膝をおろし、笑顔で言う。

「それはもう、あなたが持っているのよ」

「わ、たしが持っている？この、コートのことですか？」

「違うわよ。ここに持っているじゃない」

婦人がおもむろに指をさした。

「おなか？」

少女は指をさされた自分の腹部に目をやった。

「あつ」

手が……手が……手が……手が手が手が手が手が。

訳も分からず、少女は自分の腹部へと突き刺さっている婦人の手を凝視する事しか出来なかった。

「臍物つてね。とても暖かいのよ」

婦人は笑顔で少女の腹部へと突き刺さっている手を動かしている。すでに手首が完全に少女の腹部へと消えていた。手の平を返すように腕をひねり、やさしくゆっくりと、内臓を撫でるように指を動かす。その動作をすべて少女は感じている。未だに少女は、叫ぶこともなく、ただ、自分の腹部に刺さり、内臓を撫でているその手を見つめる事しか出来なかった。

「あ」

視覚よりも感覚の方が先に、自分の中に入って来た異物が外に出て行った事を少女に伝えていた。婦人は笑顔を崩さぬまま、そっと立ち上がり、少女は何故か引つ張られるように婦人を見上げる。

婦人の手には赤黒く染まった少女の臓物が握られている。そして、それは少女の腹部へと続いていた。少女はそれが、自分の小腸である事を理解する事はもはや出来なかった。

まだ、意識はある。しかし、出血のためか、あまりのショックのためか、すでに正気は失われていた。

婦人は手にしている少女の臓物をそっと少女の頬へと近付ける。まるで、最愛の娘の頬をやさしく撫でる母のような光景であった。

「どう？暖かいでしょう？」

「あた、あたたかかい、あたたかかい、あたたかい、あたたかい、あたたかい、あたたかい、あた」

少女は自分の置かれている状況を最後まで理解する事が出来なかった。ただ、頬に感じる暖かみだけは理解できた。今までの短い人生で、心から暖かいと思える物に出会えたという喜びが全身を包んでいた。まるで、その至福の時間を噛みしめるように、暖かい。そうつぶやきながら、少女は絶命した。

～幕間？～

アクマが女の皮をかぶってやってくる。

寒い夜にやってくる。

どんなにやさしい言葉をかけられても、
どんなにやさしい笑顔をむけられても
決して、女に近づいてはいけない。

アクマが女の皮をかぶってやってくる。
寒い夜にやってくる。

一人で夜を過ごしてはいてはいけない。
でないとアクマに殺される………

殺人衝動？

彼、パトリックアーキュリーが初めて人を殺したのは15歳を迎えた誕生日の事だった。

スラムで酒瓶を抱えて横になっていたアル中の中年男性を煉瓦のブロックで殴り殺した。

殺人という事に対して、罪の意識は特になかった。

その後、彼は定期的に人を殺め続けた。近所に住む独り暮らしの老人を浴槽で溺死させ、同級生を崖から突き飛ばし、クラスメイト首を切って、同僚を監禁し餓死させ、叔父の四肢を切断し、母をも手にかけて。

実の母親を殺した頃、彼はすでに30を越えており、妻もいた。母親の死体はバラバラに解体して、森の奥深くへと打ち捨てた。母親は失踪扱いとなり、彼の周囲の人間は彼に同情の言葉を送り、励ましの言葉を並べる。彼が街一番の親思いの息子であった事は有名だった。

そう、彼の周囲の人間は彼の異常性に誰一人として気付いていなかった。近所の住人も、同僚も、親戚も、妻さえ、彼がごく普通の、真つ当な人間であるという事を疑いすらしない。殺された実の母ですら、ナイフで切りつけられながらも自分の息子が異常な嗜好を持っているとは信じなかった。

彼の殺意の矛先が向けられるのは人間に限られた。

彼は他の快樂殺人者のように殺人に至るまでに、小動物やペットなどを殺すといった行為には至らなかった。初めから、彼の中に湧き上がる衝動は殺人のみだった。

それ以外に興味はなく、殺人衝動こそ彼の生きる理由であり、唯一の快樂だった。それも、殺人を増すごとにただの人間では無く、より関係の深い近親者を殺したいという殺人衝動が強くなっていった。彼は恨みや憎しみから殺人衝動が起こるわけではない。むしろ、その逆で今まで殺してきた近親者はすべて彼の大切な友人であり、肉親であつた。大切であればあるほど、彼の殺人衝動は強くなり、より残虐なものとなつていった。

実の母を殺して2年ほどが経過し、ぼんやりとしている時、妻をどのように殺すのか考える時間が増えて行つた。

ふとした瞬間に頭の中で殺人を行いだした頃、それが彼の殺人衝動の始まりだった。いつ殺そうか、どうやって殺そうか、四六時中その事ばかり考えるようになり出した頃、彼の妻の誘いで少し離れた大きな街にシヨッピングに向かう事になった。明日にでも妻を殺そうとしていた彼にとってその誘いは渡に船だった。

冬に備えて、新しいコートが欲しいと楽しそうに話す妻の横で、彼は静かに殺人の予行練習を頭の中で繰り返していた。

それは、コートの事を考えるにはまだ暖かい、木漏れ日の淡い陽射しが穏やかに揺れていて、木々の葉がほのかに赤みを帯び始めた、そんな秋の日の事。

彼の最期は実にあつけないものだった。

馬車の暴走による客車の横転事故。たまたま道路側を歩いていた彼は客車の下敷きとなり、横を歩いていた妻に怪我は一つも無かつた。

買い物をしようと出かけ、大きな街についてすぐのことだった。

意識が薄れていく中、彼は自らの死を悟った。自分の命が無くなること自体、特に何も感じる事はなかった。自らの殺人衝動はやがて、自らに向けられる。

そんな予感がいつも頭の隅にあつたからだ。ただ、彼には悔いに思う事があつた。それは妻の事だ。

妻を残しては逝けない、妻にさみしい思いをさせてしまう。そのよ
うな一般的な人間が抱く感情はなかった。ただ、あるのは妻への殺
人衝動だけだった。まだ、彼女を殺していない。ただそれだけがひ
たすらに悔しかった。

彼は彼の手を握って泣きじゃくる妻に向かって言葉を発した。まだ
死にたくない。僕にはまだやるべき事がある。君にしてあげたい事
があるんだ

そうして殺人狂、パトリックアーキュリーはその素顔を誰にも知ら
れぬまま、35年の人生を終えた。

幕間？

何が起こったのか分からなかった。

夫を誘って、街に買い物に出かけただけ。夫と二人で出掛ける事はよくあることだった。ささやかな休日の楽しみ。子宝には恵まれなかったけれど、それほどさみしいと感じた事は無かった。私には夫がいた。それだけで十分すぎるほど幸せだったのだ。

なのに、なのに、さっきまで私の横を歩いていたはずの夫は力なく、道端に倒れ込んでいる。

まともに、頭が働いていない。混乱していた。握っている夫の手からどんどんと力が無くなっていく、血の気が引いている、体温が下がっている、そんな知りたくもない事が伝わってきて、私の混乱に拍車をかけている。訳もわからず、ただ私は泣きながら、夫の手を握る事しかできなかった。

夫が、何かを言っていた。必至に聞き取ろうとするけれど、よく聞こえない。

自分の嗚咽がうるさい。人だかりがうるさい。必至で客車をどけようとしている人たちの掛声がうるさい。うるさい。何も聞こえない。

瞬間、今までうるさいと感じていたすべての雑音が止んだ。

一瞬にして、世界から音が消えていた。そして、夫の命も消えてしまったという事がわかった。

夫の命が消えた瞬間、私の世界も死んでしまった。もはや、私はただ、泣き崩れるだけの人形と変わりはない。ただ、ただ、私は夫

の横で泣き続けた。

「もう、泣かなくてもいいですよ」

気づけば、私はどこか知らない森にいた。横には夫が倒れている。何も考えることができず、ただ、声の主を探した。

見渡すと、私の正面に奇妙な男が一人立っていた。

シルクハットをかぶり、モーニングを着た、大きく太った男だ。まるでピエロが正装をしたような出で立ちだった。にやりとした歪んだ笑顔を崩さないのもピエロにそっくりだった。

名前を尋ねると、男は、人からは千年伯爵と呼ばれていると答えた。

「あなたの大切な旦那さま、生き返るとしたらどうしますか？」

「えっ？」

「私は、死んだ人間をよみがえらせることができるのですよ」

たぶん、まともな心理状態であつたならば、相手にもしない言葉だつたけれど、私はひどく、混乱していたし、夫のいない今後なんて考えたくもなかった。

「生き返るのですか？」

「はい。いますぐにでも」

「……お願いします」

その後の事はよく覚えていなかった。

気づけば私は夫の胸の中にいて、夫の体は真っ赤に染まっていた。ああ服が汚れてしまった。たぶんこの汚れは取れない、新しい服を買わなくてはいけない。私の血で汚してしまった。悪いことをしてしまった。何故だろう、そんな事をぼんやりと考えていた。

もう二度と動く事が無いと思っていた夫の体が動いた事がすごく、嬉しくて、安心して、なぜ、夫の手が私のお腹に刺さっているのか、なんて事は考える事ができなかった。ただ、夫が生きて動いているという喜びだけが全身を包んでいた。

ただ、何故だか夫が泣いているように見えた。それが嬉しいから泣いているのか、哀しいから泣いているのか、よくわからなかった。そんな事を考える前に、私の意識は途絶えた。

殺人衝動？

少女の死を確認すると、婦人は少女への関心が無くなったのか、まるでおもちゃ遊びに飽きてしまった子供のようになり、先ほどまで愛でるようにさすっていた少女の臍物を手から離れた。

手から離れた臍物は少女の顔にあたり、そのまま少女の膝元へと落ちたが、少女がそれに反応する事はなかった。

少女に羽織らせていた毛皮のコートをそっと手にとって、そのままそのコートを羽織る。コートには少女の血液が付着していたが、婦人はさして気にする様子でもなく、何事もなかったように廃屋を後にした。

外には無数の街灯が立っていたが、一つとしてあかりを灯している街灯はなかった。

しかし、その日の夜はいやに明るかった。婦人はその明るさの正体を求めふと空を見上げた。

雲一つ無い夜空、しかし、何故か星は見えない。見上げた先にあったのは大きな三日月だった。三日月を見上げて一瞬、婦人は何か違和感が体をよぎった。

——誰か、いる。

見上げた月の下、ちょうど婦人が出てきた廃墟の向いに面する廃墟の屋上。そこに人影があった。

元々は集合住宅だったのだろうか。見上げなくては上が見えない、

ゆうに7階はあるのではないかと思える高い建物だった。

婦人はその屋上に確かに人影を見た。高さとも明かりの逆光により、はつきりと姿をとらえる事は出来ないが、確かに人影は婦人を俯瞰していた。

シルエットが不意に動く。

「えっ？」

婦人は思わず、声を出してしまった。

先ほどまで遙か頭上で婦人を見おろしていたそれは、ドンという鈍い音共に婦人の目の15メートルほど前にいた。見上げる必要もない。先ほどまでシルエットだったそれははつきりとした輪郭を持つて、婦人が立っている同じ地面の先に立っていた。

長い黒髪が風になびいている。

漆黒のロングコートを纏い、胸元には十字の装飾が銀で施されている。片手には日本刀を携えていた。美しい造形をした顔立ちではあるが、その鋭い切れ目のせい、美少年というよりも、近寄りがたいそんな印象を先に与えてしまう、そのような少年であった。

その少年、神田ユウは気だるそうに、ゆっくりと歩を進める。

婦人は状況の把握に努めたがうまくいかない。7階建以上の建物から飛び降りて、傷一つないのだ。それに姿や雰囲気からも目の前の人間はすでに常識の外の住人である事は明白だった。

そして、ここで自分は間違はなく殺される。確信に近い感覚が婦人を包んでいた。目の前の相手は確かな殺意を持って、一步一步近づいてきていた。

気だるそうにゆっくりと近づいてくる相手をただ見つめる事しか出来なかった。

逃げ出したり、警戒したり、身構えたり、そう言った行動を取れずにいたのは相手の放つ異質な雰囲気のためか、その歩く姿が恐ろしいほど流麗で見惚れてしまっていたためか、婦人自身もよくはわからなかった。

ただ、相手が10メートルほどの距離に近づいてきた時に、ふいに歩みを止めた。何か警戒しているのか、違和感覚えたような素振りだった。その一瞬の素振りを見てようやくと婦人は呪縛から解放されたように言葉を発した。

「こんな夜中にスラムで散歩しては危ないわよ」

婦人は仲の良い友達に話しかけるように言葉を出した。返答は返ってこない。神田ユウは一步、歩みを進める。

「……あなた、何者？」

短い質問に神田ユウの足が止まった。少し考えるような素振りを見せて、神田ユウは言葉を発した。

「エクソシスト」

「エクソシスト……悪魔抜いか……ふふっ」

婦人は軽く笑い声を上げると、そのまま続けた。

「あなた、私の中の悪魔を払ってくれるの？いえ、すでに私自身が悪魔かしら……」

神田ユウは何も答えない、また一歩、歩みを進める。

「あなた、人を初めて殺したのはいつの頃だった？」

世間話をするように軽いトーンで婦人は話かける。殺したことがある？という質問にしなかったのはある種、相手に対しての敬意に似た感覚だった。神田ユウはやはり答えない。また一歩、歩みをすめる。おそらく、これ以上言葉を投げかけても無意味である事は婦人も理解していた。

しかし、婦人は言葉を投げかける。まるで使命感を持つように続いていた。

「私はね、18の頃、暴漢に襲われそうになって、無我夢中で辺りにあったもので相手の頭を叩いたのよ。大きな石か煉瓦だったかよ

くは覚えていないけれど、男の頭からは面白いように血が溢れてね、
凄く、鮮やかな赤だったわ」

神田ユウはふいに歩みを止めた。婦人は気にせず続ける。

「私は男の頭を殴り続けたわ。必至だったから、男がすでに死んでいるという事にきがつかなかったのね。気づいたら、頭皮はめくれて、頭蓋骨が砕けていた。ぐったりとした男の頭からは脳みそが見えていた。私は我に返って恐ろしくなったわ。でも、それ以上になんて綺麗なのだろうと見惚れてしまっていた。気づいた時には私は男の脳を手にとっていた……」

神田ユウは歩みを進めない。じっと女を見つめている。

「それがきっかけで、私は悪魔に取り付かれてしまった。いえ、自分の中にある悪魔が目覚めてしまったというべきかしら」

婦人はなぜ、こんな事を言っているのか自分でもわからずにいた。自らの死を確信して、懺悔でもしたくなったのだろうか。いや、違う。婦人は自らの考えを否定した。たぶん、ただ、目の前の男に話したくなっただけだ。そう、よくわからない自らの心情をそう理解することにした。

一通り話し終えると、婦人は改めて神田ユウを正面で見て捉えた。

そして、先ほどまでと様子が違う事に気が付いた。殺気が消えている。つい先ほどまで確かに自分に向けられていた殺気がなりを潜めている。目の前にいる男はただ気だるそうにしているだけだった。婦人は困惑していた。その様子をどう捉えたのか、神田ユウはおもむろに口を開いた。

「あんたは、アクマじゃない」

幕間？

「今回はいつもとは少し毛色の違う任務になる」

相変わらず、書類の山に埋もれている室長室でコムイ・リーは珍しく、真面目に話をしていた。

といっても書類にまみれて直接コムイの顔は見られないので本当に真面目にしているのか真相はわからない。

普段はちゃらけているラビもブリーフィングという事もあり、一応まじめに聞いている。

「・・・の　　という廃墟でイノセンスに関わると思われる噂話あるという情報を掴んで、探索班をスリーマンセルで斥候に出したんだ。だが、その廃墟でレベル2のアクマと接敵しちゃってね、その二人が殉職した」

声から無念さが伝わってくる。こういう所がコムイの長所であり、短所でもある。あと、要領をつかめない話し方するのは間違いなく短所だ。

「それは、まああることだろう。今回の任務は何がどう違うのか、端的に説明しろよ」

「ああ。その廃墟に出入りしていた浮浪者がたまたま、アクマの転換前の姿を見たんだ。しかも、これは偶然なのだが、アクマの身元も割れている。アクマの、生前の名前はパトリックアーキユリー、体はその妻であるローラーアーキユリーのものだ。二人は三年前に交通事故にあつたという事までは確認できた。ただ、そのあと行方不明になっている」

「なんで身元が割れたのさ？」

「簡単な事だ。その浮浪者は二人を知っていたんだ。浮浪者はその廃墟が廃墟になる以前からそこに住んでいたらしい。事故が起こったのもその街なんだそうだ。アーキユリー夫妻はその街では結構な富豪として有名だったそうだ。その二人が事故に遭って、しかも、その後行方不明になったっていうんで結構な話題になったらしい。それで、顔を覚えていたそうだ」

「その街が廃墟になつた理由は？」

「わからん。その浮浪者も炭鉱に出稼ぎに出て、首になってしかたなく戻ってきたら、すでに街は廃墟になっていたらしい」

「そして、そこに表れた噂話とアクマってわけか」

「レベル2のアクマと不可解な噂話。そこにイノセンスが眠ってい

る可能性は大だ。イノセンスを見つけ次第回収、アクマは確認次第、せん滅。質問は？」

コムイは締めに入ったが重要な事が抜けている。

「そのアクマの写真や映像はないのか？」

「ああ、すまん。肝心なところだったな。悪いが映像はない。生前写真も発見できなかったそうだ」

「なら意味ないじゃないか」

「……意味は無いけど、何かすごいじゃん！アクマと戦う前に情報が入るなんてほとんどないし！あと特徴は30代の女性で美人！綺麗な格好をしているらしい！以上！」

結局最後までまじめな雰囲気を保つ事の出来なかったコムイはまくし立てた。無いよりはマシな情報といった所だろう。廃墟である以上、きちんとした身なりの女はそれほどいないはずだ。まあよしとするか。

「じゃいくさー」

いつも通り漂々とラビが言う。

そういえば、ラビとの任務は久しぶりだな。しかも、二人か……
そんな事を思いながら俺は任務へとむかった。

殺人衝動？

婦人の後方で、大きな衝撃音が響いた。

鈍い、地を伝わって響いてくる轟音だった。婦人はとっさに後ろを振り向くと、500メートルほど先に大きな土煙が舞っていた。婦人は状況を把握できずにただ、土煙を見つめていた。

「ユウ！すまねええ！！まずった！油断してアクマを取り逃がしたさ。例のパトリックさ。外見特徴が一致してる。そっちに行っただととはよろしく！まあイノセンスは発見しから取り逃がしたのはノーカンってことで！」

神田ユウとは違う声が突然響き、婦人は慌てて神田ユウへと向き直った。

そこには神田ユウ以外に人らしき姿を見つける事が出来なかった。

神田はチツと舌打ちをして、おもむろに何かを掴んだ。

それは球体に羽根が生えたような奇妙な形をしており、サイズは手のひら大くらいだった。生物には見えないが確かに中に浮いていた。婦人は神田がそれを掴んでようやくその物体が神田の周りを浮いていた事に気がついた。

「このボケ！ノーカンの意味がわかんねーよ！殺すぞ！」

神田ユウはその物体に向かって叫び出した。

すると、すぐにレスポンスがその物体から返ってくる。

「ユウちゃんこわいさー。あと、こっちはイノセンス回収を優先するから、援護には行けないからー頑張れー」

「死ね！」

神田ユウはそう言って羽根の生えた球体を後ろに投げた。

球体は地面に落ちること無く宙に留まり、少し距離を開けて、神田ユウの周りをふらふらと漂い始めた。

神田ユウの雰囲気が変わったのはその直後の事だった。

婦人は先ほどまで感じていた圧倒的な殺意である事はすぐに理解できた。ただ、先ほどと違う事はその視線が婦人には向いていないという事だ。

婦人は神田ユウの視線の先を追った。そこには息を切らしている一人の女性がいた。

美しいというよりは可愛らしいといった顔立ちで、若くも、それなりに年を重ねているようにも見えた。

女は神田ユウと20メートルほど離れた所で、ようやく神田ユウの存在に気付いた。かなり切羽詰っているようだ。

女は立ち止り神田ユウの様子を窺っている。ちょうど、ほんの数分前までの婦人と神田ユウが対峙した時と同じ構図だ。しかし、その構図を破ったのは今回は女の方だった。

突然の変体。

スクラップ工場からガラクタを集めて無理やり圧縮したような歪な姿へと変わっていく、すでに人の原型はなく、体積も何十倍へと膨らんでいる。婦人はすでに自らの理解の範疇を大きく超えてしまったためか、へたり込んで成り行きを呆然と見詰めるだけになっていた。その時、神田ユウは思い出したかのように婦人に目をやった。

「あれが、本物のアクマだ」

短い一言を告げると、帯刀していた刀を抜いた。

先ほどと変わらぬ足取りでアクマへと歩む。不気味さを感じているのか、様子を見ているのか、アクマは動かない。一步、また一步と歩みを進める神田ユウ。歩みを進めながら左手で刀身に触れながら、

「六幻」

と小さく呟く。すると先ほどまで漆黑だった刀身が銀色に変化した。それが合図と言わんばかりに神田ユウは声を上げる。

「ビビってないで来いよ。レベル2の雑魚が、あのバカに代わって殺してやる」

アクマは雄叫びを上げて、神田ユウに迫る。

その巨体からは想像も出来ないほど素早さであった。常人では目で追うのもやっとといった速さだ。十数メートルの距離が瞬きの間に零になる。神田ユウは刀を構えてすらいらない。懐に入り込み、アクマは勝利を確信する。もはや肉迫すれば、対アクマ武器とはいえ、刀ではどうすることも出来ない。喰ってやる。エクソシストを喰ってやるぞ。口を開けた瞬間、その異変にようやくアクマは気付いた。

——いない？

先ほどまで確かにそこにいた神田ユウは消えていた。

「斬降一刀」

アクマは背後に神田ユウの声を聞き、そして、刀の鐔と鞘が重なる、キンツという音を聞いた。それは終わりを告げる合図ともなった。

「あ？あああああ j d k ふ あ j : i s k d j ふ あ あ つ あ」

アクマの体が崩壊していく、致命傷となる攻撃を受けたことにすら気付かぬままアクマは自らの体の崩壊を見つめ続けている。言葉にならない雄叫びと共に、アクマは完全に消失した。

まさに、一閃。

神田ユウは踏み込みと共にアクマの体に一太刀を入れた。対峙した悪魔ですら何が起こったのかわからないほどの高速。一瞬のうちに刀を振るう勢いのまま、アクマの後方へと移動していた。神速を誇る斬撃。圧倒的な強さ、洗練された動き。芸術的ですらある一連の動きであつた。ただ、それを理解出来るものがその場には居なかつただけの話。

婦人は何が起こったのかまるで把握できなかった。突然現れた女が急に化け物になり、黒衣の少年に襲いかかった。気づけば少年は化け物の背後へと移動して、化け物は粉々に砕け散っていた。

ただ、一つ、婦人にも理解出来た事があつた。それは神田ユウがあの化け物を殺したという事だった。神田ユウが瞬間移動をした直後、化け物は砕け散った。そして、砕け散る前に婦人ははっきりと見たのだ。化け物のちょうど中心、人間で言う所の腹部の部分に、大きく横一文字に画かれた切り傷を。

婦人は、何事も無かつたかのように婦人へと向かってくる神田ユウを呆然と見詰めていた。神田ユウは婦人に言葉を発する。

「あんた、さつき、俺に殺されそうになっていた時、なんでそんなにうれしそうだった？」

「え？」

そう言われて、婦人は神田ユウと対峙していた時の自分の気持ちに
気付いた。なぜ、あんなに饒舌だったのか。

あれは懺悔でもただ喋りたかった訳でもない。気持ちが高揚してい
たのだ。これで私も死ぬ。

その事実が嬉しくてしかたなかったかのように――

「あんたは、紛れもなく人間だ。ただ、殺人を嗜好する、臓器を嗜
好するという性質を持っている、ただの人間だ。その性質を他のモ
ノのせいにするんじゃないよ。ましてや、自分の死を人任せにするな
よ。死にたいなら自分で死ぬ。あの子供の腹を裂いた小刀、持って
るんだろっ」

そついうと、神田ユウは婦人にそれ以上の事は言わずに、おもむろ
に廃墟の奥、砂煙の上がっていた方角へと姿を消した。

殺人衝動？

先ほど、小さな少女を手にかけたナイフはコートのポケットへと仕舞っている。

ナイフを手取る。柄には少女の血がこびり付いていた。

18のころ、初めて人を殺した。

それから、十を超える命を奪い、臓物を漁り続けた。

一般的な社会正義や倫理、道徳は持ち合わせていた。自分の行為がどれほど神にそむき、法にそむき、人の道を外れた行為であるという事も理解していた。

でも、あの頃から私は、臓物に触れ合うために、生きてきたと言っても過言ではなかった。

そして、自分が死ぬときも臓物を求めていたかった。だから、刀で切り殺されるという状況を私は喜んだのだ。でも、少年は私を殺してはくれなかった。

私は先ほど、少年が化け物につけた横一閃の傷を思い出していた。

あれは、もはや美しさすら感じる切り口だった。

ほんの数分前には、あの傷が私についていたかもしれないのだ。それを想像してしまった以上、もはや私に選択肢は無い。

あれほどは巧くは出来ないとは思っけれど……

やはり最期は、多くの臓物を見るためにもお腹を横一閃に裂く、割腹自殺がいいと私は思うのだ。

殺人衝動　了

殺人衝動？（後書き）

思った以上に長くなりました。

最後まで読んで下さってありがとうございます。本当にありがとうございます。

初2次小説です。初Dグレです。いや、これをDグレと呼んでいいのか…？

ラビユウで書きちゃうぞ！とか思いながらプロット練ってたら、こんな話になっちゃいました。……どうでもいい裏話をすみません。

色々思いはありますが、蛇足になりそうなので余計な事は言わないようにします。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7981j/>

殺人衝動

2010年10月13日15時56分発行